神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

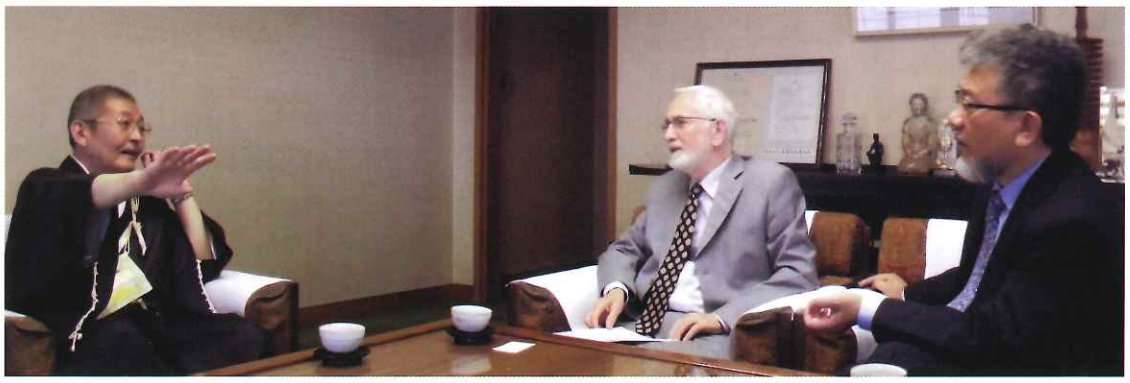
Vol.51
神道国際学会会報
平成27年8月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会　〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F　電話：03-6805-7729　http://www.shinto.org

鼎談『聖徳太子思想の中心にあった神道』（第1回）

聖徳宗総本山法隆寺管長 大野玄妙
×
マールブルク大学名誉教授 マイケル・パイ
×
神道国際学会 理事長 三宅善信

五月十八日、日本で最初にユネスコ世界遺産に登録された世界最古の木造建造物として知られる法隆寺で、聖徳宗管長の大野玄妙猊下から教えを頂く機会を得た。聖徳太子は、一般的には、豪族の連合体から天皇を中心とした体制へ国家制度を整え、本格的な仏教を日本にもたらした人物であり、その思想の中心は「和を以て貴しと為す」という理念であるとして知られている。「聖徳太子における〝和〟とは、神道における〝和魂（にぎみたま）〟のことである」という独自の観点から日本人の精神性について説かれている大野管長にその神髄を伺い、連載にて本誌上で紹介する。



日本人にとって「憲法」とは何か

三宅善信　大野先生、本日はご法務ご多端の中、お時間を頂戴いたし、ありがとうございました。先生から「和魂（にぎみたま）」のお話をお伺いしようと思い、ドイツから神道国際学会の理事で、国際宗教学宗教史学会会長も務められたマイケル・パイ先生にもご一緒していただきました。

安倍政権の下、憲法改正がはじめて具体的な政治日程に上がりつつあることを考えると、あらためて、日本人にとって「憲法とは何か」を考える上で『十七条憲法』は、ひとつの指標になると思います。私は現在、国体や憲法を真正面から取り上げた『イスラム国とニッポン国』という本を執筆中ですが、鎌倉時代に制定された「武家の憲法」たる『御成敗式目』も聖徳太子の十七条憲法がそのベースにあり、「世の中が複雑になったから」と、十七条に「天・地・人」の三要素を掛けて五十一カ条で構成されています。都人からすれば、「東夷（あずまえびす）」と呼ばれたはるか関東の武家政権が作ったローカルルールに過ぎない御成敗式目が、六百年前に実在したとされる十七条憲法の精神をきちんと踏襲していることからも、関東の武家政権にもなみなみならぬ統治する意欲があったことが判ります。

法隆寺 大野玄妙管長

その点、現行の憲法は全百三カ条と、さらに倍近い数になったものの、過去の十七条憲法や御成敗式目を意識して制定されたとは言えません。数えてみたのですが、『日本国憲法』は国家の基本法であるにもかかわらず、「政府」とか「国家」という単語は全文でもたったの三回しか出てきません。しかも、本文ではなく前文にです。一方、十七条憲法はたった十七条しかないにもかかわらず、「国」という単語は八回登場し、「君」（五回）、「臣」（十回）、「官」（六回）、「民」（九回）といった具合に、国家の基本的な要素の概念規定をキッチリと使い分けています。ところが、現憲法は全部で百三カ条もあるにもかかわらず、そういった概念規定において、非常に曖昧です。

大野玄妙　それはですね、日本では元号を決めるにしろ、天皇陛下のお子さんの名前をつけるにしろ、知識人たちがそれにふさわしい言葉を故実から引き出してくることになっている訳ですよね。例えば、『冠位十二階』の言葉を一字一字陛下のお子さんの名前に付けています。また、憲法記念日は三日ですが、『十七条憲法』も三日です。そういうのに合わせてあるんですね。

三宅　もちろん千四百年前と現代とでは前提条件が異なりますが、日本の国の大きな意味での国柄ということを考える時、あらためて十七条憲法の精神というものに注目すべきですね。安倍総理は憲法改正に並々ならぬ意欲をお持ちですが、戦後初めて具体的に憲法改正のプロセスが踏まれる段になった時、私はやはり、もう一度『十七条憲法』から押さえ直して「日本人にとって憲法とは何か？」というところから問い直していただきたいものです。

大野　「憲法改正」ということに、皆さんもの凄く神経を尖らせてしまって「賛成できない」となる訳ですけれども、逆に言えば、「九条改悪」に国民が直接その意志を示してストップをかけられるのですから、そんなに怖がることはないと思います。

三宅　昨日の大阪市の住民投票（註：大阪市を解体して五つの特別区を設置するという、いわゆる『大阪都構想』への賛否を問うた）みたいにね……。

大野　そう。僕は憲法改正について議論することは良いと思うし、同時に第九条の趣旨は踏襲してほしいと思っています。

マイケル・パイ　聖徳太子の『十七条憲法』の中心理念は、「和を以て貴しと為す」ですが、これを現代の平和の夢や望みに関連づけることは可能ですか？

大野　はい、できます。ただ、京都大学の上田正昭先生がよく仰っていることで私も大賛成の意見なんですが、『十七条憲法』は、以前は特に「『論語』の学而篇の引用から来ている」と言われたのですが、内容を読んでみますと、明らかに『論語』で言うところの「和」とは違う。では、いったい何処から来ているのかと申しますと、それは間違いなく神道と仏教から来ています。もちろん、語彙や文章表現とかは道教や儒教の考え方を取り入れています。そうでないと、当時の知識人である官吏には解らなかったためです。

三宅　よく解ります。漢文で文章を書くということは既に、中国的なテキストの作文ルールに則らないと書けない訳ですから……。「和を以て貴しと為す」は、「群卿百寮早朝晏退」といった条文にも明らかなように、中国的・儒教的官僚秩序みたいなものがその前提にある訳ですが、もっと大本の根底に日本的な「和」があったのではないですか？

大野　特に思いますのは、聖徳太子の「和」の場合は、聖徳太子の人となりから考えていかなければ答えが出ないと私は思います。基本的に「聖徳太子という人は、仏教徒、仏教者、仏教研究者である」と認識している日本人がほとんどですが、それがいろんな面から来るものだとしても、実はそれ以前に「聖徳太子は皇太子である」という大前提を皆さん飛ばしているんですね。皇太子の仕事は何かと申しますと、皇祖神を敬い祀り、あるいは山や川、土地の神々――これらを合わせて「天神地祇」といいますが――を敬い祀って、世の中がうまく調和の取れた世界になってほしい。その願い以外に天皇家の仕事はないといっても過言ではないんですね。そうすると、聖徳太子も当然、自分たちのご先祖方を尊敬し敬い、遍く山や川、環境に対する畏敬の念が先に立っているはずです。

マイケル・パイ名誉教授

三宅　ということは、『十七条憲法』に書かれている「和」という字の意味するところは……。

大野　あれはあくまでも、日本人がもともと持っている、何万年も前から日本の土地柄や風土によって培われてきた、ひとつのものの考え方ですね。それを代表して言えば神道でしょう。

三宅　「人皆党有り」に表されるような、人と人同士の利害関係者……、今で言えば「○○党」といったものではなく、人間以外の山川草木鳥獣にいたるまで、あらゆるもののバランスを取ることが「和」ということですね。

大野　あらゆる全体のバランスですね……。

日本仏教は在家主義

パイ　その原則によって、戦後、法隆寺は法相宗から独立して聖徳宗を設立したということでしょうか？

大野　そうですね。聖徳太子は、そういう神道的なベースにありながら、実は皇族の中でも、朝鮮半島や大陸と非常に関わりの深い蘇我氏の系列でもあります。その系列だったために、自分の周辺の仲間や友達のほとんどが渡来人です。聖徳太子の身の回りを固めていたのも渡来人です。例えば、迹見赤檮や、聖徳太子の馬の手綱を引いていた調子丸も皆、渡来系の人です。

パイ　今日はいくつか質問があるのですが、現在の聖徳宗は、以前の法相宗とはどう違うのでしょうか？

大野　そこなんです。追々説明していきますが、実はそういう関係の中で、聖徳太子は渡来人に就いて仏教を受け入れていった。その当時、日本に入ってきた仏教とはいったいどういうものかといいますと、特に中国の南朝で行われていた梁の時代のものです。天台大師智顗らによってある程度大成した仏教とは隋から唐代の仏教を指すのですが、梁の時代の仏教は、それ以前のいろいろ模索している状況の大乗仏教です。特にこの仏教でテーマとなっていたのは、一乗思想や菩薩思想というものです。この菩薩思想に、おそらく一番最初に触れた日本人が聖徳太子だったと思います。

　そして、その菩薩思想と自分たちの日本の国がこれまでずっと培ってきた精神性や宗教観が、彼の頭の中で見事にマッチしたのだろうと思います。大乗仏教の基本は、誰一人として漏れることなく、仏道を成ずることができる。要するに、誰も置き去りにせず、皆を連れて行くんです。それが日本の精神性と非常に関わってきたということです。例えば、日本語では漢字に音読みと訓読みがあって難しいのですが、「和」と書いて訓読みでは「にぎ」と読みますが、これはポッと腫れている。あるいは、ふくよかな状態を指し、その反対が、シワシワ、カサカサした状態です。因みに、「ニキビ」や「賑わい」は、この「和」から来ている言葉だそうです。「賑わい」を作るのは、神様の世界で言えばお祭ですが、では、そのお祭はどういうものかというと、ご先祖様と一緒に豊作などを喜ぶ儀式じゃないですか。

神道国際学会 三宅善信理事長

パイ　日本の文化の中では、ご先祖に対する態度はとても根本的で大事なことだと思います。

大野　ただ、その「ご先祖様」の居場所について、仏教が説くところと聖徳太子の思うところと違う点がひとつあります。概念の中で「ご先祖様は何処に居られるのか？」と問うた時、仏教は厳然とした平等主義ですから、水平の直線方向で辿れば、もの凄く遠い西方の阿弥陀浄土に辿り着くことになっていますが、このことを日本人は理屈上は理解しているんですが、実際に「ご先祖様は何処？」と尋ねると、皆さん上を向くんです。

三宅　京都五山の送り火なんかも、その霊界観を前提に演出されていますからね。決して西方十万億土の彼方ではない。

パイ　聖徳太子が大切にしたお経は『法華経』、『維摩経』そして『勝鬘経』ですね。その中に、先祖の話はあまり多くは出てきません。それは、どういう風に捉えるべきでしょうか？

大野　仏教の説く浄土観と日本人の感じる先祖観とが、聖徳太子という一人の人格を通じて、結び合わさっているんですね。それが、日本の宗教観となって、現在に至るまで連綿と続いています。例えば、外国から新しい文化や思想が入ってきても、それらを美く日本風にアレンジした上で上手に受け入れる……。

パイ　おっしゃる通りですね。それは特に『法華経』と『維摩経』に出てくる「方便」という考えと関係はありますか？

大野　「方便」というのは、私どもの考え方では、例えば、仏様の悟りとか神様の世界といっ

たものを具体的に体感した人がいた場合、その人はその真実を一般の人々に正確に伝えられるかどうかということです。おそらく不可能でしょう。例えば、東北の震災で非常に難渋されている被災者の皆さんの気持ちを、私たちは客観的に捉えて「さぞ辛いだろう、苦しいだろう」ということは分かりますけれども、本当の辛さというものは被災者本人にしか解らない。これを私たちは「離言」、すなわち「言語を絶する世界」と言います。「真実の世界」は、とても人間の言葉で表すことはできません。しかし、その真実の世界を人間に理解させるための方法が「方便」なのです。

三宅　「方便」のサンスクリット語「ウパーヤ」とは「接近する」という意味ですからね。

バイ　もうひとつは、この三つの経典がどれも在家関係に強いですね。それもまた、一般社会と繋がる聖徳太子の考え方と関係があるのでしょうか？

大野　これは当時、中国で末法思想が流行したことが原因です。西暦五〇〇年代の中頃で、中国の南朝が梁の終わりから陳にかけての頃、短期間で諸王朝が交代するのを目の当たりにした天台宗の祖師の一人である慧思が全面に出して唱えられました。それはどういうことかと申しますと、四百年続いた漢王朝が崩壊に向かった西暦一八四年の黄巾の乱以降、中国大陸では安定した時期がほとんどなく、いくつもの小国家に分裂して、四百年間にわたっていつも内戦をやっていました。そういう中でクローズアップされてきたのが末法思想です。そんな末法の世を救うのは法華経、つまり「菩薩思想」だと……。という訳で、私が基本的に考えておりますのが、やはり『法華経』が主体であって、『勝鬘経』は『法華経』の応援団ですね。

三宅　プリンスであられたお釈迦様ご自身は王位を捨てて出家されましたが、聖徳太子は最後まで出家なさらず皇太子だった訳ですから、そういう点でいうと、徹底的な在家主義……。その意味で『維摩経』（註：この経典の主人公の維摩居士は、釈尊の在家弟子）なんです。この太子の姿勢が日本の仏教に決定的な影響を与えました。日本ではお坊様も肉食妻帯ですからね。現在でも立正佼成会や創価学会や霊友会といった在家の大教団があるように、日本では圧倒的に在家仏教徒が多いというのは、日本が仏教を受け入れた聖徳太子の時点で、かなり方向付けがあったと言えるのでしょうか。

大野　それは、仏教がインドから中国に伝わる過程が影響しています。漢帝国が崩壊した三国時代以降、大陸の北半分はずっと遊牧民の世界です。遊牧民と農耕民族は価値観が全く違います。例えて言いますと、遊牧民族はある動物と別の動物を掛け合わせて優性保護といいますか、品種改良を行って、お乳のよく出る山羊や羊にするために一生懸命努力する訳です。もちろん、農耕民族においても種子の改良などあるかもしれませんが、やはり、遊牧民族のそれとは情熱が違います。そして、上座部仏教で言うところの「戒律」を遊牧民族がそのままそっくり守っていたら、皆飢え死にしてしまいます。そうすると、どういうところにそれを見いだしていったかと言いますと、大乗精神といいますか、「戒律」をこころの問題として捉えたんです。現象の問題ではない。

　そういう中で、例えば鳩摩羅什ですと、なんと十人奥さんが居られたんです。最初に鳩摩羅什のお父さん（鳩摩炎）が、インドのカシミール地方から入ってきましたが、彼は元々大臣の家柄だったのですが、その方が出家して現在の新疆ウイグル自治区にあった亀茲という国に入ってきた。その亀茲の国王が感激して迎え入れて、国師にした訳です。そして、自分の妹を無理矢理にお嫁さんにさせて、その二人の間に生まれたのが、かの鳩摩羅什です。為政者である亀茲国王は、仏教を深く信奉していた人ですから、当然それが破戒に繋がっているということが解らないはずがないもかかわらず、それを行っていく……。後秦の創始者姚萇が鳩摩羅什の存在を知り、「鳩摩羅什を欲しい」と思うのですが、なかなか実現しない。そして、姚興の時代になってやっと連れて来る。その時にやはり、鳩摩羅什の知識の種が惜しいと思って、十人の貴女を鳩摩羅什の元に遣る訳です。それ以降、彼は僧坊に住むのを止めて還俗して官舎に住みます。そして、お説法の度に彼は臭泥の中から生えて美しい花を咲かせる蓮の花に例えて、「花を取って臭泥を取ることなかれ」という風に言ったと……。その辺で「こころの出家」というものがクローズアップされて、在家仏教の形になっていったと言われています。

（次号へつづく・文責編集部）

教派神道連合会 百二十周年記念式典

六月十一日、國學院大学の常磐松ホールにおいて、教派神道連合会百二十周年記念式典が、彬子女王殿下ご臨席の下に開催された。近代国家としての必須要件のひとつである「信教の自由」の保証と、全国民が参加すべき国家の祭祀としての「神道」の両者を共存させるために編み出された「神道は宗教にあらず」という明治国家の方便であった。それによって、「宗教たる神道」を目指した神道大教・黒住教・神道修成派・出雲大社教・神道扶桑教・實行教・神習教・御嶽教・禊教・神理教・金光教・大本（現在の加盟教団）の連合体である「教派神道連合会」（結成当初は「神道同志会」）の結成百二十周年記念式典が開催された。

各教派の管長・教主列席の中、黒住宗道黒住教副教主斎主の下に「賢所遙拝」が行われ、彬子女王殿下が玉串を奉奠された。また、主催者を代表して、神道国際学会の理事でもある教派神道連合会理事長の芳村正徳神習教教主が式辞を述べた。

式典に続いて、同大学の有栖川宮記念ホールにおいて祝賀会が開催された。田中恆清神社本庁総長をはじめとする来賓十数名による鏡開きが行われ、乾杯の発声は、世界連邦文化教育推進協議会の東久邇信彦会長が務めた。東久邇信彦氏は、父方の祖父が東久邇宮稔彦王で祖母が明治天皇の皇女聡子内親王。母方の祖父が昭和天皇で祖母が香淳皇后という全員が皇族という「皇族以外では最も天皇家と血縁が近い人物」である。

なお、幕末明治維新時、官軍の東征大総督として江戸へ下向した有栖川宮熾仁親王は、維新後、左大臣・参謀総長・神宮祭主・初代日本赤十字社総裁等の要職を歴任したが、その父の有栖川宮幟仁親王は、政治とは距離を置き、教派神道を管轄した神道事務局総裁や皇典講究所（國學院大学の前身）総裁などを歴任したという歴史的経緯もあり、國學院大学の有栖川宮記念ホールでの祝賀会開催となった。

教派神道各教派の教主・管長を従えて、主催者として式辞を述べる芳村正徳神習教管長

横浜国大がワークショップ「下町の祭礼文化」を開講

祭礼や神信仰の起源や歴史を学ぶ

横浜国立大学（横浜市保土ケ谷区、長谷部勇一学長）が学内外に参加を呼びかけて企画・運営する「横浜都市文化ラボ」のうち、二〇一五年度の春期ワークショップ「下町の祭礼文化」（担当講師＝室井尚教授）が四月から七月まで、全十一回の講義や体験学習などを経て、このほど終講した。昨年度上半期に続く開講。都市域の社会的変化にめげず伝統的な祭礼の継承に尽くす人々の姿に触れるとともに、町会組織の結束維持に役割をもつ祭礼文化や神社の存在意義などを学んだ。

一般からも参画できる「横浜都市文化ラボ」だが、同ワークショップを受講するのは、同大学の教育人間科学部の学生が大半。とくに演劇などの芸術系科目を学んでいく人間文化課程に属するため、演劇の原点ともいえる神事芸能や祭礼文化を再認識する趣旨を持たせている。

前期に続き今期も、東京・入谷に鎮座する小野照崎神社（小野貴嗣宮司、御祭神＝小野篁公）の祭礼に焦点を当てた。

四月の全体的なレクチャーに始まり、続く五月には同神社の氏子地区の一つ、坂本町会を訪れ、町会長らから地域の現状をヒアリング。神職からは信仰や祭礼の歴史を聞くなど、フィールドワークを実施した。

五月十六、十七日に斎行された例大祭では、町内神輿の巡行に、担ぎ手で参加。五月下旬から六月にかけての後半では、レクチャーも核心に入り、専門家や神道研究者らによる講義も加味され、テーマへの学びを深めた。また希望者は、同神社に程近い真源寺（入谷鬼子神）で七月初旬に催された、下町に夏を呼ぶ風物詩「入谷あさがお市」も見学した。

なお六月九日の講義には、本会の栗本慎一郎会長（元・東京農業大学教授）が招聘され、担当の室井教授とともに、神社や神信仰の起源や展開について話した。

小野照崎神社にスポット――町会や神職への聞き取り、神輿担ぎ体験など盛り沢山で

小野照崎神社の祭礼で神輿を担ぐ受講生たち

参加の学生ら、例大祭で威勢よく神輿渡御

例大祭での神輿渡御には約三十人の学生が参加。十七町ある氏子町会のうち、ワークショップに協力した坂本町会の巡行へ二日間にわたり、加わった。

当日、参加者は、少子化で廃校中の旧・坂本小学校の校舎で法被に着替え、巡行の出発地点に結集。町会長の「焦らずゆっくり行きましょう」との挨拶と御神酒での乾杯を合図に、元気よく出発した。「セイヤ！」の掛け声も勇ましく大通りを進み、やがて社頭に着くと、神職による祓いを受け、本殿に向かって拝礼し神徳を祈念した。

二日目には、全町会による連合渡御があり、祭りは最高潮に。初日には多少の戸惑いを見せていた学生らも威勢よく地域住民にとけ込み、産土神に安寧を祈る心や、ハレの高ぶり、そして下町の心意気を肌で感じていた。

「祭礼や神事芸能は演劇と深い関係が」演出家の中野敦之さん

「下町の祭礼文化」に事務方として関わる演出家の中野敦之さんは、同ワークショップに祭礼現場へ赴く実地体験を組み込んだことについて、「そもそも演劇というのは、祭礼文化と密接に関係している。たとえば『能』の原初形態は神事芸能にあると言われています」と話し、原形を垣間見る意義を強調する。

中野さん自身、横浜国大に在学中、当時、同大で教鞭を執っていた劇作家の唐十郎氏に師事し、現在はその門下として劇団を統率している。「ご存じのように、唐十郎の演劇というのは、屋外演劇を重視しているわけです」

とはいえ、下町の町内会の人間関係は濃密だ。「そこは戸惑いもあるけれど、ワークショップに協力いただき、勉強させてもらっていることに、礼を尽くしたい」

神輿担ぎについては、「学生たちも慣れてないし、まあ、迷惑をかけるほうが多いけど、一応、ご恩返し半分。そして『楽しんじゃえ』が半分」と笑いながら話してくれた。

本会の栗本慎一郎会長も講義――「祭礼・神社・神話の起源は比較的新しい」中央アジアからの波及や影響を強調

六月九日、横浜国大での講義には、栗本氏が登場。担当の室井教授とともに、日本の祭礼や文化の歴史的な起源、特質などについて学生にレクチャーした。

栗本氏はまず、今につながる祭礼の起源について、「せいぜい六世紀の頃にできあがったものにすぎない」とした。そして、その直前の状況に関して、応神王朝のころに中国の中原地帯、ウルムチ近辺から弓月君（秦氏の祖）の一族が来朝し、日本で行われていたアニミズム（自然崇拝）に取って代わる信仰形態をもたらしたと話した。

室井教授は、栗本氏の説を補足するかたちで、四世紀から六世紀、バイカル地方の遊牧民だった蘇我氏系の人々が北日本に流入し、すでに西日本にいた物部氏系を圧迫しながら、その後の日本の文化や祭祀形態に影響を与えた可能性があると解説した。

続いて栗本氏は、自然の中で営むアニミズムには存在しなかった神社（神殿）を作ったのも蘇我氏系だとし、中央アジアにあった太陽信仰も加え、神社やアマテラス崇拝は確立したとした。そして「いわゆる日本神話というものも、じつは極めて新しいものなのだ」と強調。その上で「水田農耕の定着」「大陸から進出してきた民族の動き」「移入した思想を加味してまとまった日本神話の成立」という時期を捉えて、「四、六、八世紀というのが重要で、時代の画期になった」と語った。

その日本神話について同氏は、「スキタイの神話と酷似している。今のカザフスタンの西側にいたスキタイの人たち、つまりパルティア（安息国）が関係し

栗本慎一郎会長によるレクチャー

ている。蘇我氏がそれを意識的に日本に持ち込み、神話を作っていった。それを奪取したのが天皇系の集団だった」と考察を展開した。

「対立や支配でなく、異質が同居する共存文化」栗本会長
「神と仏の棲み分け、大和と出雲の併存――二つの軸が存在する」室井教授

同時に栗本氏は、権力の「双分制」についても論及。政権を担う王と、陰の王が存在して分治する連合国家シュメールの制度が日本にも影響を与えたとした。「天皇と為政者、右大臣と左大臣、山の文化を持った山岳の民と常民と呼ばれた低地農耕民――。そこには対立とか支配というものは薄く、二つの異質なものが同居し、分担していた」と話し、文化の共存性を指摘した。

諸文化が同居する形態については室井教授も、「稲作と山の文化があるとか、仏教が入ってきても神信仰と棲み分けるとか、出雲の国津神系が、大和に征服されるというよりは、大事な存在価値を持っているとか、そのように二つの軸があるというのは興味深い」と付け加えた。

話題はさらに、時代を下っての信仰の変質へ。栗本氏は八幡信仰の祭礼にも話を進め、「八幡信仰は武神だが、その大規模な祭礼が、天皇や武士とは異なる形で盛大に広まったのは江戸時代になってから」と話した。出雲系のスサノオを盛んに祀ることについても、「スサノオを前面に出して祀るなんて本来だったらありえないこと。支配されている庶民が自ら共同体を作り盛り上がるために、近世になって祭礼を賑やかにやった面がある」と述べ、同時に「祭礼には騎馬民族に関係がある要素も見られる」と、その複雑さを指摘した。

最後に同氏は、より古い古神道が残る神社の存在に触れ、「いわゆる日本神話に文句を言っている。つまりそこでは、歴史観がまったく違う」と紹介。また神社の変質や変形、さらには新しい要素が加わる場合があるとして、「時々のいきさつによって、都合のいい書き換えもある」と強調した。

まとめとして室井教授が栗本氏に対し、祭祀や神事の構造に関して、「カオスを呼び込んで人心を活性化させる」「共同体の意識を強めたり、個々人の精力を再生する」などの一般的な解釈についての意見を求めた。栗本氏はそれに対して、「そういう側面もあるかもしれないし、それはそれでいいのだが、それだけではないし、時に言い過ぎや言い訳もあると疑っていくことは大事だ」と応じ、レクチャーを締めくくった。

（T.S.記す）

書評

現代の死と葬りを考える―学際的アプローチ

近藤 剛［編著］

ミネルヴァ書房、2014年10月刊、296ページ、ISBN978-4-6230-7142-5、3,800円(税別)

評／山田慎也

近年、葬儀産業の成長に伴い、中国、韓国、台湾など東アジア諸地域では、葬祭業従事者の育成に関する高等教育が積極的に展開され、葬儀の研究や教育を行う専攻が大学や大学院に設置されるようになってきた（国立歴史民俗博物館他編　2014）。2014年夏、筆者も調査を行ったが、台湾では「殯葬礼儀師」と称する葬祭業従事者の国家資格化に伴い、宗教系や看護系の大学や大学院で殯葬学科が設置され多様な科目が開講されている。

日本においてはまだこのような葬儀の専門教育はわずかであるが、本書によれば神戸国際大学においても、産学連携プロジェクト・実践型ライフデザイン講座において「葬儀ビジネス論」「葬祭セレモニー論」が開講されているという。その学際的研究拠点形成のために「現代における死生観と葬送儀礼の多様性に関する研究」（近藤剛先生代表）というテーマで共同研究が組織され、その成果が本書である。

本書は序章および第一部死生観の研究で第１章から第５章まで５本の論考が、第二部葬送儀礼の研究で６章から11章で６本の論考が掲載されている。各章のテーマはそれぞれの専門の立場からの問題関心に従って執筆されたため、死や葬送というテーマが基盤にあるものの、なかには論文相互の相関性が低いものもみられる。

しかし、全章を通じて積極的に死と葬送の現代的な課題に取り組もうとする意欲が強くみられる。例えば多くの論考で言及され、考察の対象とされているのが「直葬」であり、本書に通底する現代的課題であることがうかがえる。

この直葬とは、亡くなっても葬儀などの儀礼を行わず火葬のみすることをいい、東京では２割程度といわれている（山田　2004）。このような現状に対し、葬儀に対する不満や世俗化によって遺体処理としての直葬に至ったことを分析し、年忌法要など葬儀後の儀礼の重要性を指摘する（７章中野論文）。そして社会的規範であった葬儀が次第に選択的行為となる現状から、命のあり方を見つめる必要性を説いている（８章松田論文）。こうした直葬現象は遺族の選択であるとともに、葬儀産業の立場からも、式場を必要としないためネットからの容易な参入と価格競争で状況がさらに助長され、究極の個人化が進展していると分析する（11章高嶋論文）。さらに本来自らの身体を処分可能とする身体観に留まるものではないにもかかわらず、直葬は死体処理的な危険性も孕んでいるとの懸念も示されている（２章三宅論文）。要は現代の葬儀において、死者との新たな関係性の構築と心理的な癒しが確保されているかが重要であり（９章堀論文）、そこでは葬送を行うとはどういうことであるのかという葬送倫理が求められていると指摘している（６章近藤論文）。

つまり、直葬というある種、究極的な葬送が一般に認知されつつある現代において、葬儀とは何かを改めて考える必要がある。本書はさまざまな研究分野から現代の死と葬送の問題点を投げかけているものであり、今後ますますこのような研究の蓄積が図られるべきと考える。とくに葬儀産業など、死の専門家を必要とする現代社会においては、専門家教育を進める必要も生じており、本書のような研究も求められていくものと考える。

山田慎也　2004「葬儀の意味するもの」藤井正雄編『仏教再生への道すじ』勉誠出版
国立歴史民俗博物館・山田慎也・鈴木岩弓編　2014『変容する死の文化―現代東アジアの葬送と墓制』東京大学出版会

連載 神道ＤＮＡ

『自己犠牲なきデモクラシー』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表　三宅善信

長年にわたる自らの放漫財政が招いた国家財政危機に対して、EU（欧州連合）とIMF（国際通貨基金）が支援を差し伸べてくれた際の「最低条件」である「緊縮財政」に対して、緊急国民投票まで実施して「OXI（反対）」と叫び、逆ギレしているギリシャ情勢を見ていると、日本がまだ弥生時代であった二千年前、すでに高度な「文明」を有し、世界最初の「民主制」を採用した民族の末裔とは思えないというのが、多くの人々の共通した思いであろう。

ギリシャ問題に端を発するEUの金融危機については、2011年11月に刊行された『神道フォーラム』第42号で詳しく解説したので重複を避けるが、今回のギリシャ危機をこのまま看過すれば、人類社会が過去百年間にわたって「普遍的な価値」として信じてきた近代国民国家や民主主義政体という「常識」を揺るがすものになりかねない。

個人や企業が借金をした際に、その債務が弁済できなくなると、借入時に「担保」として指定していた不動産をはじめ有価証券や美術品などが差し押さえられ、競売に掛けられ、それらを現金化したもので、債務弁済の資金として充当されるのが当たり前である。その際、借り主に選択の自由などは存在しない。借金の全額を弁済し終えるまで、貸し方の管理下に身を置かれ、場合によっては、借り方の意思など無視して、不動産等の切り売り処分がなされるのである。

おそらく、これは前近代の封建国家や全体主義共産体制下においても普遍的に通用する「原理」であろうから、借金の返済は、民主主義なんぞよりも、より高次のより優先順位の高い義務であろう。その意味で、ギリシャ人たちに選択権なんぞ存在しないのである。しかしながら、ギリシャには「OXI（反対）の日」なる国民の祝日まで存在する。かつて、隣国イタリアに攻め込まれた際、国民が銃を取って立ち上がったのではなく、手に手に「OXI」と書いたプラカードや横断幕を持ってデモ行進したそうである。そう言えば、民主主義を表す英語「デモクラシー」はギリシャ語由来の単語である。

一方、アベノミクスによる繁栄を謳歌する日本においては、選挙権を付与する年齢を従来の20歳から18歳に引き下げる法案が、安全保障問題をはじめ、これだけ鋭く与野党が対決している国会において、衆参両院とも全会一致で可決、成立した。高齢者と比べて、選挙の投票率がおよそ半分しかない青年層に、より政治への関心を持ってもらうことがその目的だそうである。

この決定に、マスコミも諸手を挙げて賛成し、「諸外国と比べて遅すぎたくらいである」とも論評したが、彼らの視点は重要な問題を見落としている。それは、日本以外の多くの国では、今でも徴兵制が敷かれ、「いったん緩急あれば、義勇公に奉じ…」と、若者は自らのいのちを投げ出してお国のために戦わねばならないのであるから、選挙権があって当然である。

さらに、日本では、20歳未満は「少年法」の規定によって、同じ犯罪行為をしても、その罪を減免されたり、民法上の「成年規定」によって、契約行為の主体になれないなどの点も多々あるので、これらの諸法律の保護的規定をすべて「18歳未満」に改正しなければ、法体系としての整合が取れなくなる。

青年層の投票率が低いのはむしろ、候補者（政治家）の年齢が高すぎるからである。現行の方式では、政策以前の人間的感性の部分であまりにズレがありすぎる。それなら、被選挙権年齢も18歳まで引き下げるべきである。そうなれば、青年たちがより社会の問題に真摯に向き合うようになるであろう。青年層に「政治」に対する潜在能力があることは、候補者の年齢層が若い「AKB48の総選挙」への熱心なコミットメントを見れても明らかである。あの情熱を国家の発展や国民の福祉の増大に向けるだけで十分なのだから……。

神社巡り⑤
芳村正徳

世田谷八幡宮

●東京都世田谷区宮坂1-26-3

東京世田谷の鎮守として古くから広範囲にわたって多くの人々から崇敬を受けてきた世田谷八幡宮は、昭和四十年代まで活躍した路面電車「玉電」の支線として敷かれた世田谷線「宮の坂駅」（東急電鉄）からほど近い場所に位置し、そのご鎮座は約九百数十年前にさかのぼる。

第73代堀河天皇の寛治5年（1091）、当時朝廷から陸奥守として任ぜられた源義家が、幾多の苦戦を重ねて清原家衡（いえひら）を攻め平定した後三年の役（1083～1087）の後、戦地からの帰途にあった義家は豪雨のためこの地に足留め状態になり、天候の快復を待つために十数日間滞在することとなった。もとより敬神の念の強い義家は、この度の戦勝は日頃より守り神として信仰する八幡大神の加護によるものと深く感謝し、宇佐八幡宮の分霊を当地に勧請（かんじょう）し、盛大なる勧請奉祝の祭りを行い、里人に対して郷土の鎮守神として篤く信仰するよう教えたのが始まりという。

東京農業大学相撲部による奉納相撲

平安時代から鎌倉時代に清和源氏、桓武平氏など武家を中心に崇敬を集め、現在日本国内に7817社（岡田荘司による）といわれる八幡信仰。祭神は応神天皇（誉田別命（ほむたわけのみこと））とその母、神功皇后、宗像三女神が祀られているのが一般的だが、当社では応神天皇の父、仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）が祭神であり、境内にある末社厳島神社に三女神のうちの市杵島比売命（いちきしまひめのみこと）が祀られている。

義家の勧請から約450年ほど経った第105代後奈良天皇の御代、天文15年（1546）に当時世田谷城主であった吉良頼康（よりやす）が、社殿を修築造営し正遷宮を行っている（棟札による）。この時、頼康は備前雲次の太刀（二尺三寸）一振りを寄進し、社宝となっている。これより吉良家の祈願所として、神職は当時の家臣老職大場家の分家が務めて来たが、天正18年（1590）、豊臣秀吉の関東征伐の際、吉良氏は小田原の北条氏と共に滅んでしまう。しかし、翌天正19年から徳川家康によって守られ、旧社領11石は朱印地となった。その後、宮崎家が12代に亘り神職を務めていたが江戸末期から蔵重家が神職となって現在に至っている。

世田谷八幡宮の中心的な祭りは4月3日に行われる春季大祭と、敬老の日の前の土日2日間に亘って行われる秋季大祭だが、特に秋季大祭では東京農業大学相撲部による奉納相撲が行われている。これは義家がこの地に八幡神を勧請した際、士卒に奉祝相撲を取らせたことが始まりである。

世田谷八幡宮神殿

勧請から数百年を経ても奉納相撲は盛んに行われ、江戸期には氷川神社（渋谷区東）、鹿嶋神社（品川区大井）と並び「江戸三相撲」と呼ばれるほどの人気を博した。

昭和39年5月に旧社殿を残しつつ鉄筋建築の社殿を造営。また平成26年11月には耐震性の問題から社務所を取り壊し、その新築工事を行った。

祭礼の際の神輿の担ぎ手不足は、全国の多くの神社に見られる問題である。「世田谷」という名に反して、都市化が進み高級住宅街のイメージが強くなると同時に地縁が薄れてしまった同地域にあって、世田谷の総鎮守とも言われる世田谷八幡宮の伝統的祭祀や行事を継承しつつ教化活動によって氏子を啓蒙する手腕は、同様の課題を抱える国内各地の神社にとって今後の参考となるのではないか。

話題のこの人

『古事記』に魅せられ研究に取り組む

アンダソヴァ・マラル博士

佛教大学総合研究所特別研究員

神話世界の多彩な展開を読み解く

中央アジアの大国、カザフスタンに生まれた。文学少女で、幼い頃から日本の古典に描かれた世界に惹かれていたという。そして日本へ留学。「そこで出会った『古事記』が、私の人生を大きく変えたのです」

『古事記』がもたらした衝撃を胸に、研究者への道を歩もうと決意。日本の大学院に進学した。

『古事記』の魅力とは何か？「まず、一三〇〇年も昔の古い言語で書かれたものが、そのまま今に残っているということ。私たちは、当時の言葉そのままで、古代の人々の心に触れることができるんです」

そもそもカザフスタンでは、叙事詩や歌は「口承していくもの」と考える伝統があり、古い時代に書かれた書物は残存しないという。「だから、古い文体への憧れがあったと思う」

魅力のもう一つは、神話の世界が豊かなこと。「視点の置き所によって世界が変わっていく。そのストーリー展開に感動しました」

ソ連邦に属した時期は、カザフでも宗教や神話は否定された。ソビエト崩壊後、古い信仰を復興する機運が高まったが、カザフで信仰される一神教下では『古事記』のように、多数の神々が縦横無尽に活躍することはない。

太古の豊穣な物語に満ち溢れた『古事記』。この神話を、イデオロギーのベースと判断することには否定的だ。「神話と向き合うことは、自分なりの新しい世界を発見したり、辛い時や悲しい時に癒されたりすることだから」

神々が見せるシャーマニックな体験が『古事記』の世界を変貌させる

今、『古事記』研究の視座として提起しているキーワードは「シャーマニズム」である。神々や登場人物のシャーマニックな体験によって、物語の「舞台」は劇的に変化していくというのだ。例えば、天上の世界〈高天原〉と地上世界〈葦原中国〉に対して、〈黄泉国〉は地下世界として捉えられていました。ですが、イザナギがイザナミに会いに行くという、その体験によって、〈黄泉国〉は、地上世界と一続きになっている世界から、〝恐ろしい世界〟へと変わっていくのです。両神が永遠の別れを誓い合うことで、物語は大きく展開し、〝生者の世界〟と〝死者の世界〟が分かたれるわけですね」

垂仁天皇の皇子で、ものの言えないホムチワケによる出雲訪問の物語にも、シャーマニズムの色彩は濃厚に見て取れるという。「ものを言えないというのは、彼のシャーマンとしての性格、つまり神性を示しているのです。そのホムチワケは出雲の大神に憑依され言葉を発するようになりました。つまり彼にとって出雲というのは、根元的とも言える重要な空間だったことになります」

物語の読解を表現する醍醐味

物語という記述に「何」を読み取るか。そして、自分の理解をいかに表現していくか。その一連の作業に心を砕く。そして、そうした作業こそが、研究の醍醐味だと考えている。

「『古事記』をカザフ語に翻訳して、自国の人たちにその魅力を伝える作業も試みたい」と意欲をみせている。

平成十六年、カザフ外国語大学東洋言語学部卒業。平成二十五年、佛教大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。佛教大学総合研究所特別研究員。論著に『古事記　変貌する世界―構造論的分析批判―』など。

後の祭り

懸野直樹（野宮神社宮司）

祭というと神事があり、神輿の渡御（とぎょ）や様々な神賑わいの行事あるが、実は「解斎（げさい）」により聖から俗に戻り、あるいは神人共食の「直会（なおらい）」によって完結する。皇室におかれては新嘗祭の前に厳重な潔斎をされるが、神事終わって後「おちの粥」といわれるお粥をお召し上がりになり、神社参拝の折には退出される時にも「手水」をお使いになる。かつて斎王は退任される時に、わざわざ難波津に出られて禊をされてから京に戻られた故事がある。これが一般においては「足洗い」となる。

少人数の祭典では神饌（しんせん）を分け与えるが、多くはあらかじめ用意されたお神酒の小瓶、お干菓子や乾物セットをお配りすることになる。これは必ず口にしていただきたいと思う。神輿や山車、地車が出る場合には町内会や団体ごとに「足洗い」をするのが通例で多くは「無礼講」となる。ただ飲み食いしているだけに見えるが、実はこの場にも神様は来ておられ、ご一緒に楽しんでおられるのである。場所がない、手間がかかると「後日料理屋で」となるかも知れないが、簡単でも良いから当日にお神酒一杯でも頂いていただきと思う。

祭にはもう一つ「神葬祭（しんそうさい）」がある。昨今の葬祭で軽視されがちなのが「通夜振る舞い」である。「遷霊ノ儀」「葬場祭」はもちろん重要であるが、魏志倭人伝の昔より「歌舞飲食」するのが大事であった。故人をほめたり、けなしたり、思い出話をするのを新御霊（あらみたま）は聞いておられ、振る舞われる食事こそ現世最後の食事となる。余談になるが本来通夜祭は「御霊の今一度戻り来たらんこと」を祈るのが本義であるから、先に「遷霊ノ儀」（御霊を霊璽（れいじ）に遷す）を行う事は、万一にも蘇生する可能性を絶無とすることになる。死後二十四時間以内の通夜祭であれば、通夜祭の後に遷霊ノ儀を行うべきであると考えている。

仏式の場合、僧侶の中には通夜振る舞いの派手なる事を嫌う人がいたり、気の利いた説教の一つもせず帰る人がいるが、これでは「葬式仏教」にもなるまい。

葬場祭、発棺祭、火葬場祭、帰家祭と一連の神事が終わると「仕上げ」となり、帰宅した時には「清め塩」を使う。これまた葬儀という「聖」から「俗」に戻る行事なのである。昨今、宗教者なしの直葬が流行りと聞くが、せめて故人を偲ぶ一献くらいはしていただきたい。もっとも死ぬ方も「死んでくれて清々した。さて骨は電車の中にでも置いて行こうか」とならぬよう、心したいものである。あまり顰蹙を買う人生を送ると、それこそ「後の祭り」となる。

神道史学会大会、皇學館大学で開催

上島享・京都大学大学院准教授が「日本中世神祇秩序の形成」と題して記念講演

前日には伊勢国司・北畠氏の館跡などを調査見学

今年で61回を迎えた神道史学会大会が6月7日、伊勢市の皇學館大学で開催され、全国から会員・研究者ら70人が参加した。

前日には伊勢国司・北畠氏の本拠地であった三重県津市の多気地域に所在する北畠氏館跡の発掘調査跡を見学し、北畠氏ゆかりの北畠神社を正式参拝した。この多気地域は伊勢神宮への参宮街道である伊勢本街道に面している。これまで30数回にわたる発掘調査で、伊賀・志摩など領域を越えて伊勢国司として勢力を保ち続けたその全容が解明されつつあるが、同様の遺物が出土した福井県・一乗谷（盆地状の地形）の朝倉氏遺跡との類似性など、生産技術系譜の研究が待たれる。

学会ではじめに、神道史学会代表の清水潔皇學館大学学長が挨拶。「戦後、受難の時代を迎えた神道界も70年の歳月を経て、ようやく本来の姿を回復してきた。本学会は神道再生のために大いに役立ちたい」

また学生らによる研究発表（司会＝河野訓・皇學館大学教授）では、上島享・京都大学大学院准教授が「日本中世神祇秩序の形成」と題して記念講演した。

募集　上賀茂神社・北野天満宮でフィールドワーク

本年秋は、毎年恒例のセミナーに代わり、神道国際学会の会員様向け公開フィールドワークを開催いたします。歴史ある神社を訪問し、正式参拝の後、神宝等を拝観、神社の由緒について宮司様から拝聴し、本学会理事ならびに研究者の先生方から当該神社にまつわる専門的な説明を受けるというものです。

本年10月31日（土）の午後、神社の中で最も格式の高い「二十二社」の内から、北野天満宮と上賀茂神社を訪問し、併せて、有職故実に則った平安時代の装束や寝殿造りを再現した風俗博物館を見学します。

北野天満宮では、国宝の拝殿で正式参拝を行い、国宝『北野天神縁起絵巻』を拝観いたします。また、今回の訪問の直前に式年遷宮を終えたばかりとなる賀茂別雷（上賀茂）神社では、正式参拝の後、ユネスコの世界遺産にも指定されている境内を案内していただきます。当日は、観光バスを借り切って団体行動いたします。

参加ご希望の方は事務局まで　①参加者氏名　②会員番号　③連絡先電話番号　④請求書送付先住所　⑤同行者がいる場合は全員の氏名　を添えて、「神社巡りツアー参加希望」と明記し、メール（info@shinto.org）またはファックス（03－6805－7769）でお申し込みください。参加費の振込用紙等をお送りいたします。尚、お申し込みは神道国際学会会員に限らせていただきます。（同行者は会員以外の方も可。）

記

集合日時：2015年10月31日（土）12:00（時間厳守）
集合場所：JR京都駅八条口（新幹線側）の観光バス乗り場
定　　員：30人（申込み先着順、最低催行人数15人）
参 加 費：3,000円（集合場所までの往復交通費は自費）
予定順路：12:45北野天満宮→14:30上賀茂神社
→16:30風俗博物館→17:30京都駅

※正式参拝をいたしますので、男性はネクタイ・上着着用、女性もそれに準じる服装でお越しください。
※昼食は済ませてお集まりください。

理事の業績・研究報告

栗本慎一郎会長

2014年9月―15年3月　横浜国立大学横浜都市文化ラボ講義シリーズ

2015年3月　横浜国立大学横浜都市文化ラボ講義録「この人を見よ、栗本慎一郎」横浜国立大学横浜都市文化ラボ発行

ジョン・ブリーン副会長

最近、近現代の伊勢の研究をメインにし、日本人イエズス会士不干斎ハビアンが17世紀初期にしたためた『妙貞問答』の研究もつづけている。『京都新聞』の連載記事も2014年の秋から2015年の春にかけて執筆していた。ここ一年間は日本国内で東京、葉山、京都、また海外のオーストリア、スロベニア、イギリス、アメリカ（ロサンゼルス、ユージーン、ポートランド）などで研究発表をしてきた。主な業績は左記の通り。

書籍

『神都物語：伊勢神宮の近現代史』吉川弘文館、2015年、181頁

Lo Shinto: una nuova storia（Mark Teeuwen ノ共著; E.Giulia 訳）Astrolabio Ubaldini, 2014、277頁

論文、新聞記事など

「伊勢神宮の公共性」『本郷』118号2015年、18-20頁

「神苑会と宇治山田：近代的聖地の形成をめぐって」『瑞垣』231号、39-56頁

「アムネスティ・現代の言葉」『京都新聞』（夕刊）、2015年5月26日、2頁

「京都の中の伊勢・現代の言葉」『京都新聞』（夕刊）、2015年3月16日、2頁

「靖国：関於戦後的天皇与神社」刘岳兵編著『日本的宗教与历史思想：以神道藻為中心』天津人民出版社、2015年、304-316頁

「粟田神社」『神道フォーラム』50号、2015年、8頁

書評　笠谷和比古著『武士道：侍社会の文化と倫理』（エヌティティ出版2014年）『神道フォーラム』50号、2015年、9頁

「降誕祭・現代の言葉」『京都新聞』（夕刊）、2014年12月19日、2頁

「近代的聖地としての伊勢」『遷宮記念国際セミナー出雲と伊勢：古代王権と聖なる空間』NPO法人神道国際学会、2014年、71-81頁

「神社と祭りの10月・現代の言葉」『京都新聞』（夕刊）、2014年10月20日、7頁

「柔らのすすめ・現代の言葉」『京都新聞』（夕刊）2014年8月18日、2頁

「あら、うそやうそや：『妙貞問答』「神道のこと」について」末木文美士編『妙貞問答を読む：ハビアンの仏教批判』法蔵館、2014年、439-458頁

「2013年の式年遷宮に思う」『神道フォーラム』48号（2014年、2月）、2頁

「伊勢神宮と遷御の儀」Nichibunken Newsletter 88、2013年、9-10頁

芳村正徳理事

2015年4月28日　東日本大震災被災地（福島県）視察

2015年4月29日　大和教団大國神社40周年記念大祭参列

2015年5月11日　教派神道連合会理事会出席

2015年5月29日　（公財）日本宗教連盟理事会出席

2015年6月3日　国際宗教同志会理事会、例会・記念講演会出席

2015年6月9日　教派神道連合会理事会出席

2015年6月10日　第16回神道講座（國學院大學）出席

2015年6月11日　教派神道連合会120周年記念式典、祝賀会出席

呉善花理事

韓国論の第一人者として韓国入国拒否にもめげず、真実を語り続けている。韓国の反日感情の実態を世界に伝え、日本の対処法を提案するために、ベストセラー『なぜ「反日韓国」に未来はない」のか』（小学館）の英文版化。（たちばな出版より2015年7月16日発行）

編集後記

『神道フォーラム』は51号で新たなスタートをきりました。第50号記念の前号ではお休みさせていただいた連載記事も再スタートです。そして今回、新しい企画として鼎談シリーズを開始しました。法隆寺管長をお招きして非常に興味深いお話を伺えましたので、数回にわたって連載していきます。横浜国立大学の取り組みをはじめ、本会理事等の外部での活躍も紹介させていただきましたのでご覧ください。次号からは、絵入りの「歴史絵葉書」シリーズも始めますので、どうぞご期待ください。皆さんからのコメントやご要望をお待ちしております。（JB）

神道国際学会からのお知らせ

◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
◎ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

一般会員（年会費）	3,000円
賛助会員（年会費）	10,000円
（法人会員（年会費）	100,000円）
特別賛助会員（個人・一時金）	30,000円
特別賛助会員（団体・一時金）	500,000円

NPO法人 神道国際学会　〒158-0096　東京都世田谷区玉川台2-1-15　ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729　Fax. 03-6805-7769　info@shinto.org